

サンタクロースのお師匠さま
石路つわぶきと春菊しゅんぎくひとめぐり

道具小路



富士見L文庫

目次

一
春
9

二
夏
75

三
秋
141

四
冬
211

あとがき
320



これから私は、彼女達の準備ができるまでの暇つぶしとして、ある季節ひとめぐり分の話をおあなたに語ろうと思う。

●
初めに、あなたはサンタクロースの存在を信じているだろうか。

誰しも一度はクリスマスの夜に、プレゼントを貰ったことがあるだろう。それは、もしかしたら私が送り届けたものかもしれない。そう、我々は、サンタクロースの存在を信じている者の元にだけ現れる。決して姿は見せないが、それでも確かに現れる。

サンタクロースは実在する。

何故そんなことが言えるのかというと、お察しの通り、私とそのサンタクロースだからだ。

「なんじゃそら、嘘だよ！」

と言われても仕方がない。だって私は、間違いなく本物のサンタなのだから。

道行く猫に「どうしてきみは猫なんだい？」と尋ねる人がいるだろうか。つまりはそれと同じこと。千の言葉を用いて「どうして私がサンタなのか」を説明するのは容易いが、

「それはそうとしてそこにある」ものなのだと素直に受け取って頂きたい。今までサンタの存在を信じていたのなら新鮮さの欠片かけらもないことだろうが、信じていなかったのなら、この事実にはさぞかし驚いたことであろう。

そして、意外に思うかもしれないが、サンタクロースというものは立派な職業の一つであって、きちんと給料が発生する。ではどこから金銭が貰えるのかというと、国からだ。

国は、毎年予算の中に『赤服費』というものを組み込んでいて、そこからサンタクロース業に必要な経費などが出る。毎年のクリスマスに、大量のプレゼントを用意しているのも政府である。

それから、サンタクロースという人間は、実は一人ではない。世界中にたくさんいて、みんな自分の担当の地域を持っている。我々は魔法使いではないから、たった一晩の間に一人きりで世界中の子供たちにプレゼントを配ることなど出来ないのだ。

——ああ、そう言えば自己紹介をしていなかった。

私は、とある雪国の山の奥深くにある『サンタ日本支部キタグニ』で働いている、石薙いわなぎという者だ。

年齢は伏せておくが、あまり若くはない。サンタ歴は二十年、ということだけ明かしておく。いわゆるベテラン・サンタだ。

あと、さつきから私は自分のことを「私」と呼んでいるから勘違いされているかも知れないが、私はれっきとした男性だ。私を、上品で美しく、琥珀こくろの髪かざりの似合う淑女だと思っていたのなら申し訳ない。私はすね毛ボーボーである。

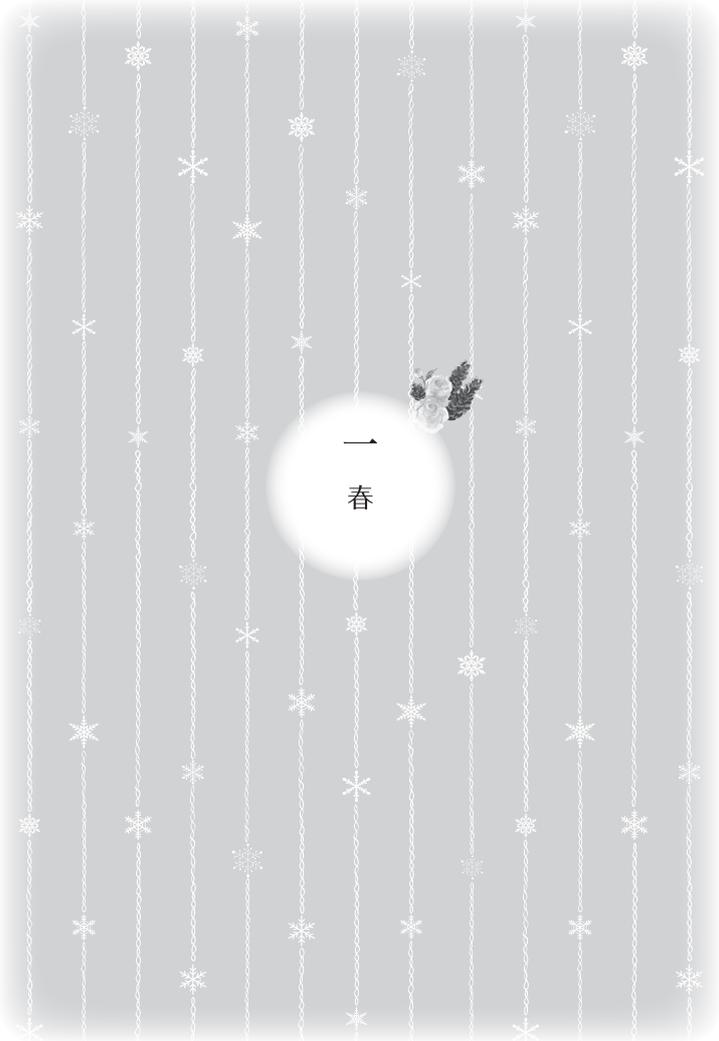
さて。

どうして私がここまでサンタクロースの知られざる秘密を打ち明けたのかというと、話を始めるに当たって、我々の実情をあなたに知っておいて貰いたかったのだ。

……いや、実情というか「サンタクロースの世界もなかなかややこしいんだな」、くらいに思っただけならば十分。サンタについての情報は国家機密だが、今回は、私とあなただけの秘密ということで、ひとつ。

舌もいい具合に回り始めてきたので、前置きはここまでとして、早速、話を始めよう。

つまりは、私と、私の弟子、春菊しゅんきくについて。



一
春

この支部キタグニに春菊しゅんきくがやって来たのは、雪解けからそう久しくない、春先のことである。

温ぬるい風の吹く穏やかな日だった。

私は事務所の中で、昨年のクリスマス当日にかかった費用を国に報告するための書類を作っていた。毎年この時期に計上して提出しなければならぬ、我々の仕事だ。

数字をあっちへこっちへこねくり回して三時間。昼を少し過ぎて、窓から日の光が差し込んでくる頃、外から大きな悲鳴——文字で表すなら「ふんげえ」という声が聞こえてきた。

すぐに私はジャンパーを羽織り、猟銃を片手に外へ出た。冬眠から覚めた熊が、トナカイ舎のトナカイを狙ってやってきたと思っただのだ。この時期にはよくあることで、そんなときは空砲を撃ってやれば追い払うことができる。

玄関のドアを小さく開いて、外の様子を窺うかがった。

一面に芝生の茂る幼稚園の校庭ほどの庭に、さんさんと日の光が降り注いでいる。青空を泳ぐように二羽のすずめが飛んでいる。

事務所の隣に建つトナカイ舎をチラリと見てみたが、熊のいる気配はない。

しかし、油断は禁物。

私は庭に出て、辺りを警邏けいろうすることにした。

敷地の周りに連なる木々の新緑あたらが瑞々みずみずしい。雪解けの水に光って、全てが生まれ変わったように眩まぶしかった。

ここに住んで十年になるが、やはり春は心地がいいものである。私は乙女チックな感性も持ち合わせているので、なんだか気持ちいがウキウキしちゃう春が大好きなのよ。

などと言って深呼吸をしている場合ではない。

庭を挟んだ先にある門の前に、巨大な肉団子が転がっていた。

「何だ、あれは」

肉団子の来客は予定にない。左右に頭を振って、目を細めた。よくよく見れば、それは肉団子ではなく、ばんばんに膨れ上がった革地のリュックサックだ。

「大丈夫かい」

門番である雪だるまの声がかすかに聞こえた。

あの雪だるまは、未来永劫えいこ溶けない上に喋しゃべることのできる、不思議人工物だ。今から七年ほど前にここを訪れた魔女が作った。こいつが意外に頭が良く、割とデキる奴なので、この支部の門番を任せている。

私は猟銃を胸に抱いたまま、青々と茂る芝生を踏みしめて、ゆっくりとリュックに近づ

いた。

「石路」

雪だるまは私に気づき、枝の腕をぶるぶると振った。

私はしゃがんで、リュックを銃の先でつんと突いてみた。

するとリュックの下から、「うう」という、人間の呻き声^{うめ}がした。

「足を滑らせて転んだんだよ」

雪だるまが言った。

「ねえ石路。この子が、例の子じゃないの？」

私はリュックを両手で押して、下敷きになっていた人間を救出した。

人間はリュックの上に仰向けに張り付いて、ぜいぜいと呼吸した。リュックに押しつぶされていて息ができなかったのであろう。

その様子を見ながら、私は眉根^{まゆね}を寄せずにはいらなかった。

臉^{またた}をぎゅっと閉じ、鼻の頭を真ッ赤にして、仄かに白い息を吐くその人間は、まだほんの十五、六歳ほどの、女の子だったのだ。

「これはどうということだ」

私は雪だるまに言った。

「弟子というのは男ではなかったのか」

「さあ」

雪だるまは我関せずというふうである。

しばらくして落ち着きを取り戻したのだろう。女の子は、リュックからすとんと芝生の上に降り立つと、薄桃色のカーディガンの裾^{すそ}とねずみ色のジーンズを直し、両手を恭しく組んで、

「助けて頂き、ありがとうございます。今日からこちらでお世話になります、春菊^{はるきく}と申します。不束者^{ふつづ}ですが情熱だけは誰にも負けません。きっと立派なサンタクロースになってみせますので、温かいご指導、ご鞭撻^{べんたつ}の程をよろしくお願い致します候」

深々とお辞儀をした。

私は、ただただ愕然^{がくぜん}としていた。

国からのお達しで、この春から新しい弟子がここに修行に訪れるのはわかっていて、だが新人育成に關してもう蚤^{のみ}ほどのやる気もない私は、共同生活の中でおたんちんの人間を演じて新人を幻滅させ、早々に追い返そうと企^{たくら}んでいたのだ。

だが、まさか、女の子だと。

男であるなら拳^{こぶし}で頭をナデナデでしたり、朝方枕元に卑猥物^{ひわいぶつ}アレソレを陳列して股間^{こかん}の

富士山を冷やかしたりなどの嫌がらせもできようが、女の子となれば話は別。意地悪のひとつもしようものならそれはたちまちセクハラと称され、追い返すどころか私がブタ箱にぶち込まれてしまう。

「どうしたんですか、先生」

頭を抱える私に、女の子……春菊が、訝しそうに言った。

「先生と呼ぶな」

私は春菊を睨みつけた。

「お前を弟子とは認めないぞ。お前は女の子じゃないか。どうかしている。サンタクロースってのはな、イメージは良いかも知れないが、もの凄く重労働でキビシイ仕事なのだ。お前のその雪国もやしみたいな腕で、たくさんの重たいプレゼントを運べるものか。トナカイの手綱を引けるものか。まったく、タダヌキさんときたら」

タダヌキさんというのは、この支部を担当する国会議員である。春菊はタダヌキさんの命を受けてここを訪れたのだろうが、女の子がサンタになるというのは前例がない。おそらく、春菊は手違いによつて弟子認定してしまったのだろう。

「さあ、とにかく帰れ。女の子の弟子などたらん」

私はびしやりと言った。

しかし、春菊は動かない。動かないどころか、こちらをじいつと見つめてきた。

目を逸らすのが癪だったので、見つめ返してやる。

大きな瞳の中に私が映っている。さつと風が吹き抜けて、春菊の肩までの藍髪が揺れた。見れば見るほどに女の子。このような少女に、サンタ業が務まるものか。

「手違いではありません」

春菊は、ジーンズの後ろポケットから紙切れを取り出し、広げて見せた。

「これは政府からの指示書です。ここに、『弟子認可・春菊殿。貴殿はこれから、サンタ日本支部キタダニ勤務・石路氏に師事されること』とあります。……ほら、ちゃんとタダヌキさんのサインもありますよ。手違いなんかじゃありません」

私はその指示書とやらを手に取り、しげしげと眺め、ため息をついた。

唐草模様で縁取られた、いかにも高級そうなその和紙は、間違いなく本物の政府からの文書である。

「きつと弱音は吐きません。プレゼントもちゃんと持ちます。トナカイもしっかり走らせます。だからどうか、わたしを弟子と認めてください」

春菊は、また深々と礼をした。

私はポリポリと頭を掻いた。

なんとなく、タダスキさん、いや、政府の思惑はわかる。女性権利の叫ばれる昨今、国会で貴婦人ぶった議員連中にきやあきやあと男女平等の圧をかけられ、女性サンタの誕生を余儀なくされたのだろう。そう思い返してみれば、先月号の赤服通信（我々にとつての新聞）に、そんなお知らせが書いてあったような気がしないでもない。

しかしまさか、私のところにその第一号の卵がやってくるとは。

政府直々のお達しなのだ、断ろうものならば即刻クビであろう。

指示書を広げたまま、目だけで春菊を窺った。まだ頭を下げ続けていた。

私はもう一度、長いため息をついた。

「石路。弟子にしてやんなよ。こんなに可愛い子の頼みを断るのかよ」

そう言う雪だるまの頭を、私はペシリとはたいた。

「顔を上げろ」

春菊は顔を上げ、私をしっかりと見た。

「しばらくここに置いてやる」

ぱつ、と、春菊の表情が晴れた。

「勘違いするな。お前を追い返したら私はクビになってしまうから、嫌々、渋々、不承不承、受け入れてやるのだ。弟子と認めたわけではないぞ」

私は隠さずに本心を言った。

しかし春菊は嬉しそくに、

「今はまだ、それで構いません。きっと先生に認めてもらえるように、頑張ります！」

三度目の礼をした。

「先生と呼ぶな」

「良かったねえ」雪だるまが口笛を吹いた。

「ところで、そのアホみたいな量の荷物はなんだ。肉団子の化け物が襲来したのかと思っただじやないか」

「これは、母が、持って行きなさい、って。長く、辛く、厳しい修行を乗り越えられるように、って……」

「修行を乗り越えるどころか、お前が乗つかられて死にかけていただろう」

春菊は恥ずかしそうに顔を伏せた。

「ごめんなさい。でも、必要なもの、たくさん入れてくれたんです。お守りもいっぱい入ってます。入ってないものがない、ってくらい、色々入ってます」

「ふん。まあいい。運んでやる。……向こうにある、あの煙突のついた煉瓦造りの家が、支部キタグニの事務所兼、住居だ。その隣の木造りはトナカイ舎。元気なのが二頭いるか

ら、後で挨拶しておけ」

春菊の後ろに回り、リュックを抱えてやろうと腰に力を込めた。が、しかし、このリュックが見た目以上に重く、私はたまたま前のめりに体勢を崩してしまった。

このまま倒れば春菊を押しつぶしてしまうと思ひ、とつさに体を右に捻り、リュックの軌道を春菊からずらした。だが失ったバランスはどうにもならず、私はそのまま、春菊に覆いかぶさるようにして倒れてしまった。

ずん、と、私達のすぐ隣にリュックが落ちた。

鼻と鼻がつくくらい位置に、春菊の顔があった。

その頬がみるみる赤くなつて、涙目になつた。

私が弁解を揮おうと口を開きかけたとき、春菊は倒れたまま腕を伸ばし、リュックの側面に付けられていた筒状のキーホルダー型不審者用ブザーを、思いきり引っ張つた。

きゅいきゅいきゅいきゅいと、ネジの外れた鳥の声のようなやかましい音が青空に響き渡つていくのを背景に、今度はキーホルダーの先端から空中へ、救難信号弾が発射された。

「ホントなんでもあるんだね」

赤煙で空に描かれた『たすけて』という文字を見ながら、雪だるまが言った。

かくして、私と春菊の生活は始まつた。

だが、決して誤解しないでほしい。断言しておくが、押し倒したのは紛れもなくただの事故であり、私はこんな小娘に手を出すほど落ちぶれてはいないし、なにより紳士であるし、劣情などもつてのほかで、年齢の壁を乗り越えたキャッキヤウフフの恋になどは決して発展しない。今後の展開についてあなたが、いわゆるラブ・ストーリー的な予測を立てていたとすれば申し訳ない。私はすね毛ボーボーである。

この出会いの日の夜、これから自身に襲い来るであろう苦勞と心勞への憂鬱で、私は布団の中でしくしく泣いた。泣きながら、私を真つ直ぐに見つめてきたあの春菊の目を思い出した。

深海のような黒色をして、中々に芯の通つた、一癖も二癖もありそうな瞳であつた。

*

人は見かけで判断できないという格言は、まさしく春菊に相応しい。

見た目、テレビに出ているそこらのアイドルよりも整つて可愛らしい春菊である。あと

けなさの中にも品があるというのか、凶らない清楚せいせつというのか、十二単ひとえでも着せてひな壇に飾れば映えるだろうな、という感じがする。

私の今までの人生経験上、それなりに容姿の整った人間は、何事もテキパキとこなすイメージがあった。内面の器量や気質が滲み出にじて外面も良くなるのだ。だから外面の良い人間はえてして立ち振る舞いも美しい、という固定観念を持っていた。

共同生活三日目にして、私は早くも気がついた。

春菊は、クソ超ドジである。

要領が悪いとか、そういうことではない。

具体的にどんなドジをしでかしたのかを簡条書きにしたなら、大きいものから細かいものまで入れて、およそ四十二はあるだろう。たった三日で四十二である。私の固定観念は清々すがすがしく粉碎された。

四十二の詳細全てを語るのには泣けてくるので割愛するが、少しだけ紹介すると、まず、何もない所で転ぶなんてのはちゃんちゃらおかしくらいに朝飯前である。砂糖と塩を間違えるだなんてベタなドジもする。洗ったばかりの洗濯物を滑って泥地にぶちまけるなんて容易たやすい容易い。くしやみの勢いでタンスの角に額を打って、小一時間うずくまっていたこともあった。

ここいらまではまだ「ウフフツ！」と笑っていられる可愛い方のドジである。

だが春菊は、可愛いなどと言ってられない、いわゆる命に関わるドジもしでかすのである。

春菊が来た晩、風呂ふろの番を任せたら、家を丸焦まるこげにさかかけた。

支部キタグニの風呂は釜風呂かまぶろといって、薪まきで焚たくという今時珍しいアナログタイプの構造をしている。これの火を熾むす際に竹筒で息を吹き込まなければいけないのだが、春菊ときたら北風もびつくりの肺活量で息を吹きまくり、それはもう見事な炎をこしらえた。いや、あれは、炎、というか、火柱ひばしらであった。

火柱は薪釜におさまらず、アツと言う間に屋根に引火した。事態を知った私が絶叫したのは言うまでもなし。必死決死の消火活動で鎮火したが、風呂の外壁一帯と、屋根の一部が焼け焦げて真ッ黒まっくろになった。

また次の日の朝、春菊はトナカイを失神させた。

支部キタグニでは、朝から昼過ぎぐらいまで、健康管理の一環としてトナカイを放牧するようにしている。なので私は「トナカイ舎からトナカイを出してきてくれ」と春菊に頼んだ。「牽引けんいんできるるように、手綱てなづなをつけてから外に出してくれ」と。春菊は、「がってんで」と鼻息を噴き、両こぶしを握うって頷うなづいた。

結果的に、全然がってんではなかった。

普通、手綱というものは口に嚙ませるように装着するものだが、それを春菊は勘違いして首につけ、あろうことか思い切り引つ張り続けた。トナカイ舎から春菊の「きゃああっ！」という悲鳴が聞こえてきたときは驚いた。駆けつけた私の目に飛び込んできたのは、首を絞められ、痙攣しながら泡を吹いて横たわる二頭の落ちたトナカイと、その脇でおろと慌てふためく春菊である。何が「きゃああっ！」か。「きゃああっ！」と叫びたいのはトナカイの方である。

その日の夕飯の料理中には、カボチャを切ろうとして手を滑らせ、隣で米を研いでいた私に包丁を飛ばしてきた。食卓では醤油と灯油を間違えて用意していた。

「お前はサンタになりに来たのか、私を殺しに来たのか、どっちだ」

とろとろ燃える暖炉の前。絨毯の上で申し訳なさそうに正座する春菊に、私は言った。

「あんまり無茶苦茶すると、私だって泣いちゃうんだぞ」

「わざとじゃないんです……」

春菊はか細く言った。

「一生懸命やろうとしているだけなんです……」

それは私だって、最初は、「この娘は、もしかして本物のひょうろく玉なのか？」と思

ったものだ。

だが一概にそういう訳でもないらしい。

春菊は、デスクワークは得意なのである。

私が一日かかる費用計上を、ひとつのミスもなくものの半日で終わらせたり（本人曰く、電卓を使わず暗算しているらしい）、政府に宛てた報告書においては「このまま投稿すれば芥川賞でも獲れるんじゃないか」というくらいに素晴らしい文章をしたためた。

数字に強く文才のあるアホなどいない。つまり、溢れんばかりの情熱とやる気が空回りして大失敗を引き起こしているのだ。

「いいか。お前は何事も一二〇%で取り組んでしまうからドジをするんだ。アクセルをちよつぱり緩めろ。丁度良い塩梅というものを学べ」

「先生の仰る通りにします」

「先生と呼ぶな。とにかく、以後気をつけるように」

うなだれる春菊は深く反省したようである。

この様子ならもう大丈夫であろう。

私は算算の引き出しから封筒を取り出して春菊に見せた。

「では早速だが、この手紙を出してきて欲しい。門を出て、山道を少し下ったところに郵

便ポストがあったろう」

「わかりました。必ずや、投函とうかんして参ります！」

手紙を受け取った春菊は、燃える目をして元氣良く立ち上がった。

「頼む。タダヌキさんに宛てた大事なものだからな。昨晚、徹夜して書いたんだ。手違いのないように」

「はい！」

くると踵かかとを返した春菊は、いきなり走り出そうとした。私は、「ゲ」と思った。

それはつい一分前に私が話した「一二〇%」ではないのか。

そして私の「ゲ」は的中する。

軸足を力を込めたからだろう、絨毯が思いきり横滑りし、春菊は「ふんげえ」と言いながら前のめりに倒れた。

そして、その手に握られていた手紙は暖炉の中へと放り出され、瞬きの間に燃え出した。

じわじわと火に食べられていく手紙。

鼻を押さえながら起き上がる春菊。

愕然がくぜんとする私。

「ああっ！」

事態に気づいた春菊は、わたわたと右往左往した。

「す、すみません、先生……！」

灰になっていく手紙から、春菊に視線を移す。怒声を浴びせてやろうと思ったその時、見計らったように、春菊の鼻から、つ、と一筋の血が流れた。

「鼻血……！」

「あっ」

春菊は慌てて鼻を拭ぬぐおうとする。

その様子を見たら、私の怒りはたちまちしぼんだ。

「動くな。上を向いていろ」

卓上のティッシュが空だったので、私は、

「裏にある納屋から買い置きを持ってくる」

と言って、事務所を出た。

そして納屋の中で「うわわおん」と泣いた。

春菊はそういうようなドジである。私の苦勞が少しは分かってもらえただろうか。無論、このようなドジを弟子と認める訳がない。というか、このようなドジにサンタは務まらない。

だから私は、春菊が私のことを「先生」と呼ぶたびに、「先生と呼ぶな」と答えた。サンタの稽古もつけていない。雑務を押し付けるばかりである。

春菊は私に頼み事をされる度に「これも修行」と呟きながら、素直に働いていた。門柱を磨いたり、商店まで青葱ねぎを買に行くことが修行なものか。しかし春菊は一切を疑わず、いつも真剣に物事に取り組んだ。

次第に私は「自分はひどいことをしているんじゃないだろうか」と思えてきた。少しくらい、稽古をつけてやっても良いのでは。

心がそう傾きかけるたびに、私は首に下げたロケットを開き、そこに収められた写真を眺めるようにした。

私と水梨みずなしが肩を組み、笑顔で写っている。

そうだ。

私は弟子はとらないと固く決めているのだ。

一時の情に流されて判断を誤ってはいけない。

私は心を鬼にして、春菊を冷たくあしらいつづけた。春菊はそれでもへこたれず、過分なドジを織り交ぜながらも黙々と雑務をこなした。

そうして春菊と暮らす日々が続き、二週間ほどが経ったときである。

「先生」

朝日に照らされながら、庭の物干し竿ざおにシーツを干していた春菊が、トナカイ舎から出てきた私に尋ねた。

「これ、本当に修行なんですよね」

私はしばらく間を置いてから、

「と言うと？」

「家事じゃないんですか？」

私は聞こえない振りをした。

「なんで聞こえない振りするんですか？」

「フンフーン」

「フンフフーン、じゃありません」

春菊は洗濯籠かごを置いて、腰に両手を当てた。

「もう二週間も経つのに、わたし、屋根に登ったりだとか、ソリに乗ったりだとか、サンタっぽいこと、ひとつもしていません。草むしりをしたり、買い出しに行ったり、門柱を磨いたりするのだって、それは最初は、先生独自の稽古なんだと思ってやってきましたけど、最近、ちょっと、『アレ？　なんかヘンかも？』って感じるんですよ。『アレ？　これ、家事じゃね？』って」

さすがの春菊もこの生活のおかしさに気づいたらしい。

それはそうか。

弟子になるべくここを訪れたのに、やらされることといえば、それこそ家事。

膨らみ続けていた疑問が、とうとうぱちんと弾けたのだ。

私は一度、首をごきりと鳴らして、覚悟を決めた。

「そうだな。お前のやっていることは、まるで家事だ。主婦とかのするやつだ」

春菊は、無言で私を見つめた。

「だから、お前が最初にここへ来たとき言ったじゃないか。私は弟子をとるつもりはない、と。お前が今まで修行だと思ってやってきたことの一切は、何のひねりもなく、紛うこと

なき家事。私はただの家事をお前に押し付けていたのだ。——さあ、私はこのようにひど

い人間であるぞ。嫌気がさしたなら去るが良い」

果たして、春菊は怒り狂うだろうか。

ぶん殴って気が済むなら殴るが良い。

私は目を閉じて、頬と腹に力を込めた。

だが、いつまで経っても春菊の言葉はない。頬も腹も殴られない。

私は目を開けた。すると、目の前、ほんの一步ほどの距離に春菊が立っていた。

ドキリとした。

てつきり額に青筋を浮かべているだろうと思っていたのだが、春菊は、今にも泣き出しそうなくらいに顔を歪ゆがめていた。

「弟子にしてください」

震える声で春菊は言った。

「わたしはサンタクロースになりたいんです。お願いします。弟子にして下さい。稽古をつけて下さい」

春菊は深く頭を下げ、何度も「お願いします」と言った。その声は次第に涙混じりになった。

どういふ事情があるか知らないが、どうしてこの娘は、そんなにサンタになりたいのだ。ぐらつく私の胸の内をさらに揺るがす、春菊の涙混じりの「お願いします」。直に良心に訴えかけてくる、なんと重たい攻撃であろうか。つらい！

もう私はいつそ、春菊の肩に手を置こうと思った。とにかく一刻も早くこの状況から楽になりましたかったのだ。

そうして春菊に触れようと右腕を上げたとき、首下に小さな冷たさを感じた。ロケットが肌に触れたのだ。

水梨。

私は腕を引っ込めた。

「駄目だ。弟子はとらん」

努めて冷たく言って、私は事務所へ向けて歩き出した。

「諦めません……」

背後から、春菊の声がした。

「わたしは、諦めませんからね！ 先生のおたんこなす！」

私は振り向かなかった。

ドアに手を掛けたところで、門前からこちらの様子を窺っていた雪だるまが目が合った。

雪だるまは表情こそ能面だが、なんとなく私を哀れむような目をしている。

私は口をばくばくさせて「何だ」と言った。

雪だるまはじつとこちらを見つめたままで、沈黙を貫いた。

*

サンタクロースはクリスマスマスの日にしか働かないわけではない。支部によって内容は異なるが、当然、普段からの仕事というものがある。

当方、支部キタグニの受け持つ仕事内容は、「雪種」の生産である。

雪種というのは、爆発性を持ったビー玉ほどの大きさの真っ白な植物の種で、これを空へ打ち上げることで発生する火花と白煙は、降雪の確率を増加させる不思議な力を持っている。

気象を操ることができるので、所持禁止植物に指定されているのだが、我々サンタクロースには「ホワイトクリスマス実現の為」という名目で特別に栽培が許可されている。

(クリスマスマスを雪を降らせることによって人々の心内で埃を被っている浪漫を刺激し、サンタ需要を高める目的がある。)

この雪種をつける「雪月草」を育てるのが、私の主な仕事。そして春の終わる今頃が、雪月草の種蒔きの時期である。

*

この日、朝食を済ませた私は早々に庭に出た。

鉄壁のように広がる濃紺の空に、時々、雷鳴が響いている。トナカイ舎の隣にある小さな畑へ向かうと、そこにはちらほらと雑草が生えていた。今日はこの畑を耕して種を蒔く予定だ。

「春菊」

畑に立つ私を、春菊は事務所の窓から遠巻きに見ていた。

「寝てていいんだぞ」

私が言うと、春菊は首を左右に振り、窓を開けて「手伝います」と言った。

自分のしていたことが無意味だと知れてからも、春菊はこの支部を去らず、それどころか輪をかけて必死に家事に取り組むようになった。おそらく春菊なりの意地なのだろう。Tシャツにジーパン姿でざくざくと鍬を振る春菊の瞳には、弟子と認められるまでここ

を去らないという強い意志が燃え盛っている。

しかし、私はフンフーンと鼻歌を歌い、何食わぬ顔を装った。

昼を過ぎて、畑は大方綺麗きれいになった。

「よし。少し休憩してから、種蒔きだ」

ちなみに、ここで作られた雪種は全国の支部へと出荷される。雪種は北陸に位置する支部でしか採れない貴重品なので、栽培の失敗は許されない。結構なプレッシャーである。

私と春菊は並んで芝生に座り、庭をうろろろするトナカイを眺めながらおにぎりを食べた。

休憩の間中、春菊はずっと歌を唄うたっていた。

「赤帽時雨」という題名で、「わたしはサンタになりたいのよねえ、かなり」という歌詞を演歌調で延々繰り返すだけのオリジナル・ソングである。

私は聞こえない振りをして、おにぎりを食べるのに終始した。

曲が八周目に差し掛かったところで、私は立ち上がって背伸びをして、

「そつたら、もう一仕事するべさ〜」

と、農家風に言った。

春菊はつまらなそうに口をとがらせ、尻しつをはたいて立ち上がった。

さて、種蒔き開始である。

私は畑の脇に置いておいた二つの布袋のうちの、雪月草の種……雪種の入っている方を探った。よろしい、前年に取り置いておいたおかげで、十分な量がある。

そしてもう一方、「虹粉」とラベルの貼られた方の袋を探って、思わず固まった。手のひらに触れる虹粉のすべすべした感覚が、弱い。

袋を開けて、中を見た。

虹粉は、光彩のない、ただの砂になっていた。

私は頭を掻きながら、思わず「まいったなあ」と呟いた。

虹粉とは、虹の根元に発生する七色に輝く砂のことで、雪月草を育てるための肥料になる。だが、一定の期間が過ぎればただの砂に戻ってしまうという扱いの難しいもので、どういうわけか私は、その期間を勘違いしていたらしい。

これでは種蒔きができない。

「どうしたんですか、先生」

「いや。肥料を切らしてしまつてな」

私の後ろから春菊がひょこりと袋の中をのぞき込んで、

「この砂は肥料じゃないのですか？」

首を傾げた、その瞬間である。

どおんと、と、まるで大太鼓を打ち鳴らしたような重々しい音が空を割った。

私と春菊とトナカイはひっくり返った。

「び、びっくりしたあ。すごい、カミナリ」

春菊は、へそを押さえて縮こまった。

そう、雷である。

この支部は標高の高い山の中にあるので、雷鳴を非常に近くに感じるのだ。

残響が遠くなっていくのと同時に、ぼつり、ぼつりと、雨が降り始めた。これはすぐに本降りになりそうである。

「戦略的撤退！」

私はトナカイの手綱を引いてトナカイ舎の中へ避難した。慌てて春菊も飛び込んできた。雨は瞬く間に土砂降りとなった。

頭上の木造屋根が、銃撃を受けているようにずどどどと鳴る。外を窺ってみたが、水煙のせいで何も見えない。それくらいの豪雨だった。

「ひゃああ。すごいですねえ」

春菊は、おっかなびっくり外を覗いた。

私は「ウムム」と唸った。

虹粉を切らしたところに、この雨。

これは運が良いのか、悪いのか。

虹というものは、当然、雨上がりに見られる現象だ。そして虹の粉は、虹の根元で発生する。

「出たくないな」

私は呟いた。

「なんですか？」

「これからお散歩に出かけなきゃいけない可能性がある」

「はあ。何故ですか？」

「虹を探しに」

「……ああ。先生は、ロマンチスト・アホアホなんです」

「誰がロマンチスト・アホアホか」

私は咳払いをした。

「いいか。虹の粉は、虹が発生しているほんの数分の間にしか採取できないのだ。雨上がりを待っていては遅い」

「先生の仰おつしやっていることがいまいわかりませんが、漠然と要約するに、この雨の中、これからどこかへ行こう、ってことですか？」

「うむ。まあ、そうなのだが」

私は再度、外を覗き見てみた。雨のおさまる気配はない。

「本来ならば、雨が降っているうちから白樺しろがほ溪谷に待機していなければならぬのだが、ちよつとこれは厳しいな。また日を改めよう」

白樺溪谷とは頻繁に虹が架かるスポットであり、ここからさほど離れていない山中にあるのだが、途中、橋のない川を一本越えなければいけない。

私は大丈夫だろうが、どうせこの娘は飛び石を飛んでいる最中に足を滑らせて、水かさの増した川に落ちてどんぶらこつこと流されるに決まっているのだ。だってドジなのだから。

そんな想像をしていた私の腕を、春菊はむんずと掴んだ。

どういう訳か、その目は爛々らんらんとしていた。

私の全身に嫌な予感が駆け抜けた。

「先生は、オモイ・タツタガ・キティ・デイトトウ？　ということわざをご存じですか？」

「そんなアイダホ訛りのことわざは知らん」
 「種蒔きに必要なものを探すんでしよう？ 行きましようよ、先生！」
 そう言い終わるが早いのか、春菊は私の腕を引っ張り雨の中へ飛び出した。
 あまりの瞬間的な出来事に、私は踏み止まることができなかった。
 シャツが濡れて肌に張り付いていき、あつという間の濡れ鼠、全身にキンとした冷たさを感じる頃、ようやく私は悲鳴を上げた。

なんじゃ、こいつ！

春菊は私の腕を掴んだまま、ぬかるみの中をずんずん走って行く。振り払おうにもがちり固められていて抜け出せない。恐ろしい腕力であった。

私は「ヒィー」と言った。この華奢な娘のどこにこんな力がある！

そのままとうとう、春菊と私は門を抜け、山道に出た。

容赦なく降り注ぐ雨粒が痛い。顔面におはじきを投げつけられているようだ。雨音がうるさかったが、走りながらずっと「赤帽時雨」を歌う春菊の楽しそうな声がかすかに聞こえていた。

*

山道をしばらく登った所で、春菊（と私）の激走は終了した。突然、春菊が「アレ？」というような顔をして立ち止まったのだ。

「えーと……。白樺溪谷って、いずこ？」

春菊は白樺溪谷の位置を知らないのである。知らないのに一体どこへ行こうとしていたのか。なので結局、私が春菊を先導することになった。

雨は少しおさまったが、依然として強い。私と春菊ははぐれないように手を繋いで、雨に煙る山の奥深くへと足を踏み入れていった。

植物が鬱蒼として邪魔な上に、泥が足に絡み付いてきてとても進みづらい。薄暗いので視界も悪い。非常に気骨が折れる。

ときおり後方を確認する。「ひぎゃあ」「うひゃあ」などと悲鳴を上げながら、春菊は後をついてきていた。

「先生、寒いです」

「これだけ濡れれば寒いに決まっているだろう」

「合羽カッパを着てくれば良かったですねえ」

「いきなり走り出したのはお前だろう。だから、事務所に戻って言うてるんだ」
「嫌です。絶対ついて行きます」

このやり取りは既に五回目である。危険があるので、私は春菊を連れて行きたくないのだが、春菊はどうしてもついて行くと行って聞かない。

「風邪ひいたって知らないぞ」

私は立ち止まり、振り返ろうとした。

しかし、

「あつ、駄目です！」

頬に春菊の手のひらが飛んできて、できなかつた。鈍い痛みがじんわりと広がっていく。いわゆるビンタを喰らわされたのである。

「何をする！」

「何をする、はこつちのセリフです。先生、今、こつち向こうとしましたよね」

「それがどうした」

「わたし、びしょ濡れなんですよ」

「はあ。だから何だというのだ」

すると今度は背中にどばちんと乾いた痛みが走った。いわゆる張り手を喰らわされたのである。

「何をする！」

「もう、どうしてわかんないんですか、先生のすけべえ！ つまりですわね……」

すると春菊は急に小声になって、

「その、し、下、下着が、透けてるんですよ、わたし、今……」

「はあ？」

私は膝ひざから崩れ落ちそうになった。確かに今日の春菊は白いTシャツを着ている。濡れれば透けるのは自然の摂理である。

だが、

「アホか。お前のような子供の下着なんぞに私が興奮するわけないだろう。何を一人で舞い上がって恥ずかしがっているのだ。自意識過剰にも程があるわ、このペツタンコ馬鹿野郎」

言いながら、今度こそ振り向いた。

春菊は顔を真っ赤にして、胸を両腕で抱くようにして隠していた。

やれやれと肩をすくめたその時、春菊は私の脇腹にグーをねじ込んだ。いわゆるボディ

を喰らわされたのである。

生まれたての子豚のような声を上げながらうずくまる私に、春菊は、「先生は、一生、結婚できません！」と言った。

枝垂れる葉を（脇腹を押さえながら）ガサガサと掻き分けていくと、どどど、というけたたしい流水の音が近くなってきた。雨は大分小雨になっていた。

「ほら先生。雨、弱くなってきましたよ。やっぱり出掛けて正解でしたね」
後ろで明るく言う春菊を無視。

ちなみに今の春菊は、私のジャンパーを羽織っている。いつまで経っても「恥ずかしいからこつちを見ないで下さいイヤッ先生のすけベイヤッ」ときやあぎやあうるさいから貸したのだ。

群れるように茂ったシダの葉の壁を抜けると、目の前の景色が拓けた。岸边に出たのである。

「わあ……」

春菊が驚きの声を漏らした。

轟々と流れる川は茶色く濁って荒れ狂い、まるで何匹もの大蛇が蠢いているようだった。

普段は流れも緩やかで澄んだ綺麗な川なのだが、豪雨の際にはこのように恐ろしい様相になる。

私は普段使用している、飛び石のある一角を眺めた。

幸いなことに水没していない。これなら使えそうである。

「春菊。あそこを見ろ。大きな石が六つ、川の中に配置されてるだろう」

一角を指差す。

「これからあれを飛んで向こう岸に渡る」

「なるほど、わかりました。では早速」

いきなり飛び石に向かって行こうとする春菊の肩を、私は慌てて掴んだ。

「なんですか?」

「なんですか? ではない」

私は春菊の後ろに立ち、その両肩を両手でがしりと固めて、飛び石へと注目させた。

「お前はすぐに行動に移そうとする。だからいつも失敗する。……いいか、大切なことを教えてやる。物事を始める前にはまず、一に観察、二に熟考、三四がなくて、五に深呼吸だ」

言いながら、今度は春菊の頭を両手で固定した。

「ようやく見てみる。あの一角は特に流れが速い。少しでも足を滑らせたなら、即、オダブツだと思え」

普段の穏やかな川ならば落ちた春菊を助けることもできようが、さすがの私だってこのような濁流には飛び込めない。サンタクロースと言えどもただの人間、森羅万象の前ではアリンコのように無力である。

「次に。六つある飛び石のうち、五つ目から六つ目の石への距離が結構あるだろう。あそこは助走が必要になる。いつもなら五つ目の石の上だけで助走は事足りるのだが、今日は水かさの増したせいで足場にできる石の表面の範囲が狭い。わかるか?」

「はい」

「だから、六つ目の石に飛ぶときは、四つ目の石から勢いをつけたまま連続で飛ぶ必要がある。立ち止まっては駄目だ。あそこは一気に飛び抜けるのだ」

「ははあ」

説明が終わると、春菊は唸った。

「すごいですね、先生は。頭が良い。一瞬で状況を判断して、そのような作戦を考えられるなんて、さすがです」

「そんなことはない。私を褒めたって、今晚のおかずが一品増えるだけだぞ」

「ご謙遜することはありません。わたくし春菊、作戦を完全に理解致しました。それでは早速」

兵隊のようにシヤキシヤキと両手両腕を上げながら飛び石に向かっていく春菊を、私はまたまた後ろからガシリと固めた。

「キヤッ!」

「キヤッ! じゃない!」私は春菊の頭をペシリとした。

「まだ行つて良いとは言っていないだろう! その噴火する積極性を少しは抑制しろ!」

春菊は口をへの字にして「ごめんなさい」と呟いた。ちよつとは落ち着くということができないのだろうか。本当に困った娘である。

「まず私がお手本として飛ぶから、お前は私が向こう岸に着いてから飛んで来い」

私と春菊は岸辺を歩き、飛び石の前までやってきた。

雨はもうほとんど上がり、雲の隙間には太陽の気配があった。虹が架かりそうである。

日が顔を出す前に白樺溪谷に着かなければならない。

「では、先に行くぞ」

私は軽く助走をつけ、一つ、二つ、三つと石を飛んだ。ここまでは慣れたものである。

春菊は胸の前に手を組んで私の飛ぶのを見ていた。ハラハラしているようだ。

さて、ここからが問題の箇所。四つ目、五つ目、六つ目と、連続で飛ばなければならぬ。向こうに点々と続く石の表面をじっと観察して、着地点に見当をつける。慌てさえしなければ、いけそうだ。

深呼吸をした。

「よっ」

私は一気に、四つ目から五つ目、五つ目から六つ目へと石を飛んで渡った。思ったよりも造作ないことであった。

六つ目までくれば、岸には容易に辿り着ける。無事に渡りきって対岸を振り返ると、春菊が両手をぶんぶんと振っているのが見えた。

「先生、すごいですー！」

私は再び六つ目の石の上に飛び乗った。ここで待って、春菊の手を引いてやるのだ。

「落ち着けば簡単だ。慎重に来い！」

大声で言うと、春菊は両こぶしを握り、「がってんです」のポーズをした。春菊が「がってんです」のポーズをして、がってんだったことはない。嫌な予感がする。

今回だけは、本当ががってんであってくれよ。

私はもう、目の前で誰かを失うのはご免だ。

「春菊、行きますー！」

体操選手のように手を挙げて、春菊は走り出した。

そしていきなり転んだ。

まだ一つ目の石にも飛び乗っていない。春菊はすぐにムクリと身を起こし、頭をコツンと叩いてペロリと舌を出し、ウインクしながら「しっばい、しっばい」とクソあざとさ丸出しの笑顔を作った。腕組みをしながら無表情でその様子を見ていたが、内心での私は汗だらだらに膝ガクガクにおしっこジョーである。

「では、気を取り直して、行きますー！」

春菊は再び助走をつけ、びよん、と一つ目の石に飛び乗った。それから流れるように、二つ目、三つ目へと飛び移って行った。それはガゼルを髻鬚とさせる優雅なジャンプで、柔らかな見事な身のこなしであった。共同生活の中で気づいてはいたが、春菊は運動神経が悪いわけではないのだ。ただそこにあるドジなのだ。

そして春菊は、問題の、四つ目の石の上に辿り着いた。

「深呼吸しろ！」と声をかけた。

焦りは油。ここで足を滑らせては一貫の終わりだ。

春菊は言われたとおりに両手を広げて深呼吸した。私は生唾を飲み込んだ。

「いざー！」

とん、と春菊が石を蹴った。

ふわりと飛んだ春菊は、なめらかな曲線を描いて舞い降りるように五つ目の石に着地した。それから勢いを殺さないように、間髪を容れず、六つ目の石へと飛ばうとした。

これなら大丈夫そうだと、私が思った瞬間である。

「あっ！」

濁流の圧で脆くなっていたのか、春菊が踏んだ石の一部が、がらりと音を立てて崩れた。空中でバランスを失った春菊は、絶望的な表情をして、虚空を掻いた。

私は無我夢中で手を伸ばす。

指と指が触れる。

届かない。

——いや、逃すものか！

軸足を足場に残したまま、全身の力を伸ばした腕に込める、

掴んだ。

そのまま思い切り、春菊の腕を引っ張った。

どん、と、私の胸に春菊が飛び込んで来た。

その時、ぶつり、と何かの切れる音がした。

足元に落ちたのは、ロケットである。春菊を胸に抱いた衝撃で鎖が切れたのだ。

ロケットは一度だけ石の上を跳ね、そのまま、とぼん、と濁流に飲まれて消えた。

続きは10月15日発売の富士見L文庫にて。